

長野市の未来を占う新たなプロジェクトがはじまる。その名も「みらいのなが」をえがこうプロジェクト（以下、

みらながプロジェクト）だ。これは、2040年に「住みたい都市」として起業者、クリエイターなどから選ばれること、また、市民が愛着を持ち続けられることを目指す、大規模な都市ブランドデザインプロジェクトだ。長野市が持つ価値やポテンシャルを整理・言語化し、未来の都市イメージを伝える言葉やロゴなどをつくることを目指している。

野市が旗振り役になりつつも、市民とともに取り組んでいることだ。若手経営者、長野市出身者、Z世代、女性移住者など幅広い属性・世代の人々を対象に、ヒアリングとワークショップを実施している。ヒアリングには、長野市出身の大手IT企業の執行役員や映像作家、市内で活躍する若手事業者など計11名が参加。「自然と生活、仕事が融合し

みらながプロジェクト 遂に始動

長野市 動く

長野市都市ブランド推進室HP



世界の“NAGANO”の知名度を活かしていきます



萩原 健司 市長

長野市は、日本で3つしかないオリンピック開催都市。それゆえに「NAGANO」という都市名は、すでに世界的にも広く知られています。これから長野市の都市ブランドを創り上げていく上で、このアドバンテージはとても大きいのではないのでしょうか。積み重ねてきた歴史や文化などの古い物語を大切にしながらも、新しいことに挑戦していく勇氣を持って、2040年の長野市を創っていきましょう。

ている「チャレンジしやすい風土がある」など、すでに貴重な声が上がっている。一方、ワークショップは、全4回を実施する予定だ。10月11日に実施した第1回目のワークショップにはなんと萩原健司市長も参加。「長野市に暮らしていて、よかった。惜しいなと思う瞬間は？」「未来の子どもたちにプレゼントするなら」「どんな長野市らしさ」を残したいですか？」などの問いに対して、いち市民の立場から参加者と熱く意見を交わし合った。ワークショップ終了後のアンケートでは「自然溢れる都市でのワークライフバランスがいい」「市民みなが『このまちが好き』

と思えるような気づきを与えたい」などと語っている。また、第1回目のワークショップに参加したほかの市民からは「視野が広がった」という意見のほか「もっと話を深めたい」といった意見も出ていることからも、2時間という限られた時間には収まりきれないほど白熱した議論が展開されたことがわかる。どうやら多くの参加者にとって改めて「長野市全体の魅力」「未来の長野市」について改めて真剣に向き合い、語り合う場となったようだ。これからはますます本格化するみらながプロジェクトの動向から目が離せない。

市民意識調査にご協力ください！
調査票配信日時：
11月18日(金) 10:00

長野市の魅力や価値などについて、市民の皆さんからご意見をお聴きしたいと考えています。ながの電子申請サービス、もしくは長野市公式LINEアカウント（友達登録がお済みの方）より、期間内にご回答をお願いします。もしよろしければ、ご家族やお知り合いにもご紹介いただくと幸いです。

調査回答期間：11月18日(金) 10:00～11月30日(水) 23:59
※長野市ホームページから調査票をダウンロードいただき、メール（toshibrand@city.nagano.lg.jp）又は郵送（〒380-8512 長野市役所 企画課 都市ブランド推進室）でご回答いただくことも可能です。

ながの電子申請サービス



独占

告白

長野市民5人の声

ヒアリングをした方のご意見を
一部紹介します。

私が見た長野市とは？

長野市は、古いものへのリスパクトがある

長野市って、歴史や文化へのリスパクトが高いです。新しい取り組みも生まれているけれど、古いものも大切に残している。リノベーションした店舗が立ち並ぶ門前エリアを見ても、その風土がよく感じられます。あと、自然が豊かだとよく言われるけれど、単なる自然ではないんです。歴史と文化の香りがするんです。たとえば、修験道で有名な戸隠なんて良い例。スイス人の友人からは「深い文化があるね」なんて言われています。

上村遥子さん

(SUNDRED 株式会社 チーフエバンジェリスト・コミュニティデザイナー / 株式会社天地人 事業開発リーダー)



鈴木隆治さん

(鈴木土地株式会社 代表取締役社長)



日常を送るには、刺激はそれほどなくていい

長野はとにかく居心地がいい。その言葉に尽きます。たしかにライブやイベントは東京の方が多く、美味しい飲食店もたくさんある。でも、新幹線に乗って帰って長野駅に降り立ったとき、不思議と落ち着く感覚があるんです。きつとその背景には、自然と共に育んだ背伸びしすぎない風土がある気がして、都会になることを追いかけるよりも、身の丈にあったことを愚直にやり続ける。お金をかけるよりも、手間をかける。長野市そのんな風土が好きです。ストレスフルな昨今、山々を仰ぎ見ながら笑顔で生活するって俺は好きだな。

渡邊さやかさん

(長野県立大学大学院 ソーシャル・イノベーション研究科 専任講師)



等身大でチャレンジする人が多いのが魅力的

長野市は、「ライフ」と「ワーク」が溶け合っているような気がします。長野県立大学で起業する学生から話を聞くと、「成功するぞ」と意気込むのではなく、力みすぎないで自然体で起業していく学生が多いんです。大学を選んだ理由も「起業するにも、住むにも、長野市は良い環境だから」という理由が多いようです。ただ、もっとグローバルな視点があってもいい。グローバル教育やネイティブとの交流があると、もっと面白い街になるんじゃないでしょうか。

くろやなぎ てっぺいさん

(企画・映像・音楽)



道路でクルマが停まってくれることにビックリ

長野市民って、みなさんやさしいですよ。東京から移住してきて驚いたのが、道路を渡りたいときクルマが停まってくれること。そんな気質の背景には、自然に恵まれていることもあるんですかね。というのも、自然に囲まれていると、エゴが小さく感じられて、自身との向き合い方、そして、他人との付き合い方も変わってくるような気がするんです。しかも、自然環境だけじゃなく、公園もたくさんあって癒やしの場が多い。人口密度も高すぎないのでも心地いいですよ。

月原はる菜さん

(映像クリエイター)



東京はずっと「オン」、長野市はずっと「オフ」の感覚

大学進学で、一度長野市を離れたんですが、就職のタイミングでUターンしてきました。その理由は、長野市で暮らした方がストレスが少なく、思ったから。実家も近くて安心だし、生活コストも低い。今は7万円の賃貸で駐車場付きの戸建てに住むことができています。そして、なにより豊かな自然に

長野市都市ブランディングのこれまで

都市ブランディングとは？

2020年5月、長野市に新たな動きが生まれた。長野市の未来に向けた長期ビジョン「長期戦略2040」が、市長に提案されたのだ。提案したのは、経済基盤を抜本的に強化するために外部人材として起用された市のブレイン4名。彼らが掲げたのは「自然の循環と経済の発展を両立させる、長野らしい、世界に誇る『産業』創造で、平均所得を倍増する」という難易度の高い目標だった。この目標に向かって掲げられたプロジェクトの一つが都市ブランディングだ。まず、2021年1月から3月にかけて、市民ワークショップを開催。学生などを中心に市内の地域資源について考えた。そこで見つけた長野市らしさは、動画制作によって表現・可視化することとなる。2021年11月から

「都市ブランディング」は「シティプロモーション」と何が違う？ 「都市ブランディング」は、長期ビジョン達成のコアになる新産業や商工、観光、農林業等の各分野の施策にシナジーを生むための取り組み。各分野を横断しながら、より効果的に市内に発信することを目指す。ここで認識しなければならないのは、「都市ブランディング」は、単なる一方的な情報発信ではないということだ。大切なのは、提供する者と享受する者の感覚が一致すること、つまり、長野市について、心地よい「好ましい」というイメージをお互いが



3月にかけて、市民ワークショップを開催。学生などを中心に市内の地域資源について考えた。そこで見つけた長野市らしさは、動画制作によって表現・可視化することとなる。2021年11月から

「都市ブランディング」は、単なる一方的な情報発信ではないということだ。大切なのは、提供する者と享受する者の感覚が一致すること、つまり、長野市について、心地よい「好ましい」というイメージをお互いが

推進室の休憩室

マンガ「スラムダンク」を原作とするアニメ映画『THE FIRST SLAM DUNK』が、2022年12月に公開される。この話題に触発されるように、最近、都市ブランド推進室でも原作を振り返りながら「一押し」の場面はどこか」というテーマで盛り上がった。

バスケ大好き係長の「ブランディングが…したいです。」

クセストーリーであるものの、プロセス自体に「山あり谷あり」といったところにはリアリティがあり、感情移入しやすく引き込まれたように思う。都市ブランディングもこれまで約2年間、さまざまなご意見・ご指摘をいただきながら、調整を重ね、紆余曲折を繰り返しながら進めてきた。まさに「山あり谷あり」の2年間だった。大切なのは、市民との価値観の共有。そのプロセス自体を楽しんだ先に、きつと流川と桜木のようにハイタッチで迎えられるクライマックスが待ち受けていると期待したい。



市内の若手プレイヤー大集合！

「みらなプロジェクト」第1回ワークショップ実施

2022年10月11日、県立長野図書館で開催された第1回目の「みらなプロジェクト」ワークショップ。市内の若手プレイヤーを中心に15名の参加者が集った。それぞれの肩書きを外しながら、全員が「ひとりの長野市民」として熱く想いを語り合った。参加者の仙波愛弓さんは「自然を楽しんでいる人が多かった。自然あつての長野暮らしだと改めて思っている」と話している。